
自室の星空

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自室の星空

【Nコード】

N79430

【作者名】

まなつか

【あらすじ】

僕、山根雅也は押入れの中からプラネタリウムの機械を見つける。そのことを後輩、梅山春香に話していたら、「今度、見せてもらえませんか？」なんて。

暗い自室の中での僕らの気持ちは、揺れ動く――

プロローグ

僕は久々に部屋の掃除をしていた。

「なんだこれ」

僕は押入れから一つの箱を取り出した。

「プラネタリウム……？」

箱にはプラネタリウムらしき球体の写真があった。おそらくそうであろう。

なんであるのかは後回しにして、とりあえず開けてみることにする。

「お、おお……」

あまり詳しくない僕でもすごいということはわかった。本格的なようだ。

そこで、やっと思い出す。小さいころ、父親が僕に買ってくれたのである。だけど、見た記憶が全然ない。ごめん、父さん。

僕は父親に心のなかで誤りつつ、説明書を取り出して、セットし始める。

「いくぞ……」

僕は部屋の電気を消し、スイッチを入れた――

プロローグ（後書き）

こんにちは。まなつかです。

パソコン替えたりいろいろしていたら時間がたってしまいました。そして、何故か新作を書いてしまいました。

結構短めですので、最後までお付き合い願います。

……最近、寒くなってきましたね。

自分も若干風邪をひいています。

大丈夫だと思いますが……。

さて、それでは第一話で。

第一話

寒い。本当に寒くなった。十一月なのにこんなに寒いなんて……。僕は手を息で温めながらすっかり葉が散ってしまった木を視界に入れた。学校までの平坦な土地を歩いていた。

「おはようございます、山根先輩」

後ろから、セミロングの髪の少女が声をかけてきた。背は若干小さめだ。

「おはよう。春香さん」

僕は一つ下の後輩、梅山春香に挨拶をする。

僕の名前は山根雅也。中学二年生だ。そして、先程の春香さんと同じ手芸部に所属している。

「ふあゝっ」

僕は大きなあくびをする。隣を歩いていた春香さんがおかしな様子で僕を見る。

「どうしたんですか？ 寝不足ですか？」

「うん……。昨日ちよつと……」

「勉強……ではなさそうですね」

「うっ……。そうだけど……。あんまりそういうことは口に出さないほうが……」

「す、すいません」

この後輩はどっか天然なところがある。そこがちよつと可愛らしい。

「それで、どうしたんですか？」

「いやー、昨日さ、プラネタリウム見つけちゃって……。それを見てただけど」

「プラネタリウム……！？ 本当ですか？！ いいなあゝ」

なんだかすごいauraやましい顔をしている。そんなに見たいものなのだろうか。

「興味あるんだ？」

「はい！ 星とか大好きです。とってもきれいで……」

僕は天文学はちんぷんかんぷんだった。昨日も一つも正座を見つけれなかった。

「星とか、見てるの？」

「先輩、ここ都会なんで街の灯りでよく見えません」

「そ、そうだったね」

あまり星を見ないせいかなそんなことも忘れていた。

「……先輩。あの……」

そう春香さんが言いかけたたん

「よお！ 山根！」

「お、和久！」

僕らの後ろから、同級生の梅山^{かすひさ}和久がやってきた。こいつは苗字で分かる通り、春香さんの兄貴だ。性格は正反対と言ってもいいほどで、やかましいやつだ。

ただ、根はいい奴だ。

「なあなあ！ 聞いてくれよ。今度発売される『愛と占拠とホワイトチョコレート』。それがさーすごくてよー」

変な趣味を持っている奴でもある。アニメやゲームに熱中してのめりこんでいる。俗に言うオタクだ。

「お兄ちゃん、少しは自重しろ！」

「あっはははは！ いいじゃないか！」

大きい声で奴は笑う。周りを歩いていた生徒が冷たい視線を送ってくる。嫌だなあ。

「先輩、先に行きましょう。ろくなことはありませんよ」

「あ、ああ」

そういえば、さっき言いかけていたのはなんだったんだろうか。

……まあ、部活のときに聞くとするか。

「お、おい！ 待てよ！ 山根えええ！」

「キモオタは独り言をつぶやいてろ」

「ひっでえなあ！」

僕は梅山を置いて春香さんと少し走った。
前に行く彼女の髪は、綺麗になびいていた。

第一話（後書き）

こんにちは。まなつかです。

今回は秋と星空を題材にした純愛物語です。

……山根が羨ましいです。

さて！（ー、ドー、）キリッ ↑開き直った

今回は自分も実際にプラネタリウムを自室にやって書いています！
なんだか静かで、綺麗でいいですよ！

ただし、値段は高めです。3万円。

父が、昔買って一回だけ見た覚えがありますが、それっきり押入れに入っていました。

おいおいおい。

さて、それでは第二話で会いましょう！

第二話

そして放課後――

僕は被服室へと向かった。

ガチャ――と扉を開ける。

「よっ」

「こんにちはー」

カタカタとミシンの音がする中、僕は先輩たちに挨拶をした。

「よっ、春香さん」

「あ、先輩……」

手縫いで布を縫っていた春香さんが顔を上げる。

「今日は何を作ってるんだ？」

「給食の時の、ナフキンです」

「へえ。僕も作ろうかな」

「いいですよ。教えてあげます」

僕は手芸部に入って二年経つが、一向にうまくならなかった。

手芸部は三年生3人、二年生は僕一人、一年生は春香さんひとりだ。男は僕しかないが、みんな優しく接してくれる。良

い人達の集まる部活だった。

そして作るものは皆バラバラだ。好きなものを作っているが、きちんと手芸部として活動している。

僕は早速布をカバンから取り出し（布と裁縫セットだけは持ち歩いている）縫い方を教えてもらうことにした。

「そこ、アイロンかけてください」

「お、おう」

「ああ！そこは……」

「ぬお……」

悪戦苦闘していた。たかがナフキン一枚で……。

「先輩」

「ん？」

僕は手を止めて春香さんに向き直った。

「朝話していた……」

「ああ、プラネタリウムか？」

「そのことなんですけど……。今度、見せてもらえませんか？」
何を言い出すかと思えば……。そんなことか。

「うん。いいよ」

そう答えると春香さんはわぁっと顔をほころばせた。

「いつ、いつ、行ってもいいですか？」

「いつでもいいよ」

「じゃあ、明日でいいですか？」

あー、明日は確か、土曜日か。親は買い物に行くらしいが……。
まあ、留守番ついでにいいか。

「いいよ」

「やった！」

相当うれしかったらしい。

その後、嬉しさのあまりか手にたくさん針を刺して血まみれにしていたのだから――。

第二話（後書き）

こんにちは。まなつかです。

いいですよ。手芸部。

私の学校にもあったのですが、今年で廃部になるので入部は断られました。

……残念です。

ちなみに、私も不器用でミシンのセッティングができません。だけど、ナフキンぐらいは作れます。

さて、二人はこの後どうなるのでしょうか？

いろんな展開が考えられますが、私の中では一つです！

それでは。

第三話

そして次の日――

ピンポーン。チャイムが鳴る。

「はいはい」

僕は玄関に向かい、開けた。

「こんにちは」

「よう。いいよ。上がりなよ。寒かっただろ？」

「はい。おじゃまします」

彼女の服装は私服にジャンパーを羽織ってきたものだった。

――そういえば、こうやって学校以外で会うなんて初めてだろうか。なんだかドキドキしてきた。

「先輩？」

「う？ あ、ああ！ そうだね。行こうか」

僕は自室にへと案内する。

「意外ときれいな部屋ですね」

「意外とは余計だよ」

「あっ、すみません……」

僕は部屋を暗くするために雨戸を閉めた。すると本当に真っ暗になって何も見えなくなった。

「痛っ！」

「ごめんなさい！」

春香さんが僕の足を踏んだようだ。足が痛い。というか、早く電気をつけないと――

パチッ

部屋が明るくなった。

「「ふう」」

二人でため息をつく。

「先輩、その機械ですか？」

春香さんは僕の横にある機械を指さした。

「そうだよ。ちょっとまってくれ」

僕はプレートをセットし、スイッチを入れた。

「電気消すよ」

「はい」

僕は電気を消す。すると天井や壁に白い点々が映し出された。

「わぁ……」

暗くて表情は見えないが、たぶんすごい喜んでいるのだろう。

「あれが、てんびん座で、こっちがとかげ座……」

「とかげ座？ そんなもあるのか？」

「はい。いろいろありますよ」

「そうなんだ。……ここ、座りなよ」

「あ、ありがとうございます」

僕はベッドにもたれかけるように座った。その隣に春香さんが座る。

「なんだかいいですね。これだけの数の星なんて、よほど空気がきれいで明かりがない田舎でないと見れませんよ」

「そうなのか？ うーん……」

そんなことを言われても、わからない。まあ、とにかくすごいと言いうことはわかった。

「……」

「……」

無言で僕は天井を見上げていた。

聞こえるのは隣にいる春香さんの息づかいのみ。

「あのさ、別のプレートもあるみたいなんだけど……」

僕は立ち上がった。なんか行動を起こさなければ、と思ったのである。

「そうなんですか？ じゃあ、冬のがみたいです！」

「わかった……けど、暗くて見えない……」

「電気、つけますね」

ぱちっ 電気のつく音がする。

「うっ……」

いきなり明るくなると、目が開けなくなる。

しばらくすると、目が慣れてきて目が開けるようになった。

「どれだろう」

僕は箱の中からプレートを探し出す。どうもわからない。

「これじゃないですか？」

「うわっ?!」

すぐ隣に春香さんがいた。近い近い近い!!

「ん? どうしたんですか？」

きょとんとした顔でこっちを見上げてきた。

「ど、どうもしてないよ……」

「そうですか。……あ、これです」

そういつて差し出してきたのには『冬の星空』と書かれていた。

「おお、サンキュ」

礼を言って受け取り、機械にセットする。

「電気、消すね」

再び部屋が真っ暗になった。

そして、僕は機械のスイッチを入れる。再び、天井や壁に星が映し出された。

「きれいですね……」

「そうだな……」

僕らは天井に映し出された星をただ、ぼーっと眺めていた。
時間が進むのを忘れて――

「先輩! 起きてください!」

「うーん……。まだ……」

「せーんーぱーい!」

ぱしっ! 左の頬に痛みが走る。

「あいったーっ!」

目が覚める。なんか白い点が見えるぞ。なんだ、たくさんあるじゃないか。いったいここはどこだ？

「大丈夫ですか？　おーい！」

「うううん？　春香さん？」

「そうです！　私です！」

「暗くてよく見えないなー」

「電気つきますね」

「んああ？」

ぱちっ　電気がつく。

「ぬうう……」

目が眩む。そして、それと同時に一気に現実世界に引き戻された。

「あれ……？　僕はなんで？　春香さんど？」

やばい。記憶がないぞ。頭がぼーつと……。

「先輩！　もう六時です！」

「ん？　おはよう」

「違います！　十八時です！」

「じゃあ、こんばんは——っじゃない！　なんでこんな時間なんだ

？」

「先輩が寝ちゃったからですよ！」

「起こしてくれたっていいじゃないか？」

そうだ。そんなことを言うなら起こしてくれたって——

「……私も寝ちゃっていましたから……」

赤面しながら春香さんは答えた。なるほど。そういうことか。

「それじゃ、そろそろ帰らないと……」

「はい。今日は本当にありがとうございました」

「ん。いいよ」

「それで、また今度、来てもいいでしょうか？」

「うん、いいよ。待ってるからさ」

「はい！」

彼女は微笑んでから「それでは」と言って部屋から出て行った。

僕もそれについて行く。

「じゃあね。春香さん」

「はい、さようなら」

ぺこんとお辞儀をしてから出て行った。

それと入れ替わりに両親が帰ってくる。

「誰？ 今のかわいい子」

「何をしていたんだ？ 余所様の子に変なことをしたら承知しないからな」

「わかってるって！ 二人とも！」

僕はその後、部屋に戻った。

「ふう……」

さっきまでそこに座っていたところに座る。まだ温もりが残っていた。

「春香さん……ね」

なんだか、彼女のことを頭から離れなかった。

その夜からずっと――

第三話（後書き）

こ、こんにちは。まなつかです。

まずはじめに報告があります。

HP始めました。

<http://manatsuka.web.fc2.com/>
まだ更新していませんが、明後日くらいから更新予定です。

この小説の感想があったら、どんどん書いてください！
楽しみにしています。

それでは。

第四話

人というものは恋をする。

それはある一人を自分のものにしたいという欲望から生まれるものだ。

「……」

僕はあれから数日たった今でもずっと一人の後輩のことを考えていた。

「うゝん……」

唸る。今度はいつ、どうやって誘うか……。そんなことを考えていた。

「おはようございます。先輩」

「あ、おはよう」

いつもの平坦な道を歩いていると春香さんがやってきた。

「よお。山根」

邪魔なおまけまでついてきたようだ。

「はあ。おはよう、梅山」

「おう。……ところで、こないだ家の妹がそちらにお邪魔したようですが……。……どこまでしたんだ？」

「お兄ちゃん!!」 「梅山っ!!」

二人同時に叫ぶ。春香さんの顔は何故か真っ赤だった。

「な、何もしていないって! そんな……ことは……」

「ほう?」

梅山が信用できないというような目で見てくる。

「ただープラネタリウムを見ただけだ」

僕は本当のことを言った。

「へいへい。お熱いですねー」

「うゝめゝやゝまゝ!」

僕は奴を睨み付けると春香さんと一緒に先を急いだ。……ったく。

「すみません。あんな兄で……」

「いやいや。……ところで、今度いつ来るの？」

僕は今度いつ来るかを聞くことにした。なんだか自分でもわからないが。

「え?! あ、はい……」

彼女は驚いたようだが、すこし考える素振りをして

「じゃあ、また日曜日に……。いいですか？」

「ああ、いいよ」

今度の日曜日にも親が旅行に行っている最中だ。偶然。

「それじゃあ、楽しみにしてますね」

「ああ。僕も機械をぴかぴかにしておくよ」

「あはは、楽しみにしてますよ」

そこで会話は途切れる。下駄箱に着いたからだ。

「じゃ」

「それでは」

僕と春香さんは別れを告げて、それぞれの場所へと向かった。

僕は下駄箱に下履きを入れる——ん? 何か入ってる。

「手紙……?」

何かいやな予感が頭を過る。

僕は恐る恐る封筒状になっているそれを開いていく。

「っ!?!」

それにはただ一言。簡潔に文が記してあった。それは例え僕が小学生だったとしても理解できる文だ。

『スキです。私と付き合ってください』

そう、書かれていた。

「よっ、何見てんだ?」

「うわっ?!」

梅山が横から覗いてくる。これは見られてはいけけないもののトップ10には入るものだろう。僕は慌ててそれを隠す。

「なんだ、ラブレターか」

しかし、簡単に見破られてしまった。僕は観念して事情を話し始める。

「朝中を見たら入っていたんだよ」

「差出人は？」

「……うーんと、うちのクラスの前木原さん」

「わお！ あの美人か！？ おめー、すげーな！ スミに置けねえ奴だぜ！」

しかし、なんで彼女は僕にそんなことを伝えたのだろうか。――まあ、好きだからに違いないだろうが。

「で、お前はどうするんだ？」

「僕か……」

僕は彼女のことはあまり知らない。だけど、僕はずっと彼女というものがほしかった。この機会に作ってしまおうか。

「お前、中途半端な気持ちはやめろよ」

「え……？」

梅山の口調が変わる。顔つきも厳しくなっていた。

「本当に好きな奴とだけ、付き合え。中途半端な気持ちはお互いを傷つけるだけだ」

その言葉は僕の心にずっしりと響いた。

「俺は――そう思う」

そういうと梅山は先に履き替えて行ってしまった。僕は一人下駄箱に取り残される。

「……………」

ごめん、前木原さん。僕は君とはつきあえない。だって――

「そうか。断ったんだな」

「ああ」

お昼の時間、僕と梅山は机をくっつけて弁当を食べていた。

「まあ、お前とあいつに接点はなかったしな」

「ん。そうだけど、なんでなんだろうね」

「何がだ？」

「なんで、あまり接点がない人を好きになるんだろう」

うーん。そう唸っている梅山を見つつ、卵焼きを口に運ぶ。ふわっ、とろっが特徴の母親の卵焼きだ。

「きつと、一つ何かで接点が生まれて、そこで、惚れたんだろう。」

そうになると、どうしてもそいつのことを考えてしまうんだろうなあ」

「接点……ねえ」

僕と彼女の接点は……同じ図書委員会ということだろうか。そういえば、前に一度だけ本を運ぶのを手伝った覚えがある。それだけで……惚れてしまうのだろうか。

「あのな。そういうことは希にあるんだ。何か心が不安定なとき、人は安らぎや愛を求めるんだよ。それでその状態の時に何か”接点”が生まれるとそこから派生しちゃうんだよ」

「ほお。今日の梅山は難しいことをいうな」

いつもあほなことしか言わないのに。

「まあな。心理学を勉強していた頃があつてな。それでだ」

「ふーん」

まあ、何にせよ人は一つの”接点”から恋だの愛だの友情だのが生まれていくんだな。

「そういうことになるか」

僕は最後の一口のご飯を口に入れると弁当箱の蓋を閉じた。

「ごちそうさまでした」

僕はそういつて席を立った。梅山も食べ終え、机を元に戻す。

弁当箱を鞆にしまい、そっとクラスの端にいる前木原さんを見た。

彼女は一人で寂しそうに弁当を食べていた。

僕はついさっき、彼女を振ってしまった。

どこかで生まれた”接点”。結局彼女と僕は結ばれなかったけど

——その”接点”があった、という事実は消えないだろう。

第四話（後書き）

こんにちは。まなつかどえす。

今回は脇役である梅山をかつこよく書いてみたつもりです。
脇役が大好きです。

”接点”この言葉がキーワードなんですかねえ。
もう少し続きますので最後までお付き合い願います。
また、感想をいただけたらうれしいです。
それでは。

第五話

「先輩、どうしたんですか？ 顔暗いですよ？」

被服室に入っているいつもの春香さんの隣の席に座ると心配そうに後輩が顔を覗いてきた。

僕はいろいろあって疲れていた。

ホント、全て投げ出してどっか遠くで暮らしたい。

「ああ。いろいろあって疲れたんだよ」

「なんですか。らしくないですね」

「今日、ラブレター貰っちゃってさ」

「え……？」

彼女の顔色がさっと変わる。

「どうした？」

「そ、それで……返事はしたんですか」

「ああ、断ってきたよ」

「そうですか……」

最後のほうは声がかすれて聞こえなくなっていた。そんなに驚くことだろうか。

彼女はまた作業へと戻っていった。

僕もいい加減ナフキンを完成させなければならぬ。とっくに春香さんは完成してるっていうのに……。

「……」

「……」

「ねえ……」

黙々と作業を進めている僕らを変に思ったのか先輩が声をかけてきた。

「あんたたち、なんかあったの？ いつもだったらしゃべってんのに」

「あ、はい。えーと、今日は作業に集中したい日なんですよー」

「そうか。がんばれよ」

「はい」

僕がそう受け答えしている間にも春香さんは何か思い詰めた様子でペンケースを作っていた。

もしかして……焼き餅？ いや、まさか……。

痛っ！ 僕は指から赤い血がにじみ出ているのを見ながらずっと考え続けていた。

第五話（後書き）

こんにちは。まなつかです。

時間が余り無いので簡潔にいきますね。

- ・テスト勉強があるので更新は出来なくなるかもしれません。
- ・テスト後も、学年で五番以内でなければP C禁止です。

というわけで、完結出来るかどうか気になりますが、頑張りたいと思います。

それでは。

最終回

そして、日曜日。

「こんにちは。先輩」

「やあ、春香さん」

今日は春香さんが来る日だった。プラネタリウムを見せるためだ。
「おじゃまします」

彼女は前回とは違う、これまた似合う服を着ていた。しかし、表情はなんだか浮かない顔をしている。

「いいよ、上がって」

僕はこないだと同じ自室に通す。家にはこの二人しかいないためか、いつもより静かに思える。

「お茶、いれてくるね」

僕はお茶を淹れにキッチンへと向かった。

「ふうー」

ほっとため息を付く。なんだか今日の春香さんはいつもと違ったような……。

僕はヤカンに水を入れてコンロにかける。その間に給主に茶葉を入れる。

「……」

お湯が湧いた。ズズズツと沸騰する音が響く。僕は火を止めた。

「……」

僕はなんだか分からない空虚感に包まれた。なんだろうか。なんだか心にぽっかりと穴が開いたような……そんな感じだ。

「……」

僕はお湯を給主に注ぐ。茶葉が浮かんできた。そしてしばらく待つとそれが開く。

「……」

僕は緑色に色がついたお茶を湯のみに注ぐ。そしてそれをお盆に乗せて二階へと運ぶ。

カチャ

ドアを開ける。

「先輩、遅かったです」

クッションに座っていた春香さんは少し怒ったように言った。

「え？ ああ。そうか。ごめん」

僕はそう言ってお茶を差し出す。

「いただきます……」

そう言ってお茶はお茶をすすり始めた。僕もお茶をすする。

「うっ……」

僕はうめき声を上げる。苦かった。

「……」

それでも彼女は何も言わずただ、すすって湯のみを持つ手元に視線を向けていた。

なんとかしないと気まずい。そう思って声をかける。

「そろそろ、上映するか？」

「あ、はい」

「電気、消して」

僕は電気が消えたことを確認してから機械のスイッチを入れた。

暗闇に一筋の線が通り、天井に星が映し出される。

「ふう」

僕はベットに寄りかかるように座った。その横に彼女も腰を掛ける。

「……」

「……」

どちらも何も言わない。ただ、天井を見上げていた。

「あっ！ 流れ星?!」

僕が声を上げる。

「ウソっ!？」

彼女も驚いたようにそれを探す。

「あ、そういえば何十分に一回流れ星が流れる機能が付いていたよ
うな……」

「そうなんですか。見れなかったのが残念です」

「そうだね」

「……」

「……」

そして再び無言の観賞会が始まる。

こないだとは違う、雰囲気だ。

——何分たった頃だろうか。

「先輩」

「ん？」

僕は天井を見上げたまま返事をする。

「先輩には好きな人っているんですか？」

急にそんなことを聞かれた。どう答えていいかわからず——

「よくわかんない」

そう答えた。

「気になっている人は？」

「うーん。それは……」

それは、春香さんだよ。そう言いたかった。

だけど、それを言っではすべてが終わってしまう。そんな感じが
した。

「……先輩。私、先輩のことが好きなんです」

「えっ——」

突然の告白に驚く僕の肩に手が置かれ、頬に何か柔らかいものが
触れた。そして、すぐに離れる。

「出会った時から、ずっと」

耳元で声がする。暖かな吐息が頬や耳にかかる。

「……」

僕はどう答えていいかわからず黙って聞いていた。

「覚えていますか？ 初めてあったとき」

僕は春香さんと最初にあった時のことを思い出した。

二年前だろうか。小学六年生の頃梅山と知り合ってやつの家に行った覚えがある。その時に一緒に遊んだ記憶があった。

それが僕と彼女の”接点”だ。そのひとつの”接点”。それがなければ今こうやって話していることは無かっただろう。

彼女は僕の返答を聞かずに話を続けた。

「あの頃から好きだったんです。……一目惚れてやつですね」

僕は横を向く。暗いから彼女の表情がよくわからなかった。

だけど、彼女の言葉だけでも、僕にはわかった。

僕はすべてわかった。

僕も、彼女のことが好きなんだと。

「春香さん」

僕はすぐ隣りにいる彼女に声をかける。

「ん？」

僕はゆっくりと彼女を抱きしめてこう言った。

「僕も好きだよ。春香さん」

その言葉がずっと言いたかった。いつからかはわからない。だけど、今こうやって言えて嬉しかった。

「せ、先輩……」

彼女も僕の背中に手を回し――

――僕ら二人は満点の星空の下、抱きしめあった。

最終回（後書き）

こんにちは。まなつかです。

無事完結することができてよかったです。

今までこんな文章力がないやつの文章を読んでもくださり、ありがとうございました。

前作『雨ノ日』では展開が早過ぎるとの指摘があつて、なるべくゆっくりと二人の関係を発展させていった……つもりです。

この話はこれで完結します。

本当はその後の話も書きたいのですが、他の小説も書きたいのでキリがいいところで終わらせていただきます。

今までお付き合い下さり、ありがとうございました。

感想をいただけたら、嬉しいです。

次回作でまた会えることを願います——
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7943o/>

自室の星空

2010年11月14日15時25分発行